

「 」を感じることができた卒業制作展

与 語 一 哉
環境計画学専攻
環境意匠コース
博士前期課程 1 回生

卒業制作展は2006年で8回目となるが、2年前から学生が主体となって展示や講評会を進めている。本年も学生が主体となって進めようとなった。

2006年の卒業制作展のテーマは「 」である。卒業制作は大学生活の集大成でもあり、新たな旅路への出発点となる。そんな僕らは無限の可能性持っている信じ、果て無き世界を共に見よう、そしてそんな僕らを見てくださいといった想いが込められている。特に僕らの学年にとっては最初で最後の共同作業であり、本当にできるだろうかと不安であった。



特に本年は論文に対する意識を高めたいとの意見が出た。例年「論文は地味である」、「論文の扱いが設計よりも悪い」といった風潮がある。議論を重ねた結果、そういった差を埋めるために同じ交流センターのホワイエで展示や講評会を行おうとなった。論文と制作の日時は別々になったが、お互いの発表を助け合うといったかたちをとった。



全体の代表を中心に、会計、会場設営、広報、看板、リーフレット、レセプション、ケータリング、議事等の担当を振り分けた。各担当が毎週行われる全体会議で報告や議題を投げかける。僕自身は看板の担当であった。どこにどういったものを作るかということであるが、もう1人の看板担当者と話し合い案をまとめ会議にもちかけ意見を求めた。地道な作業であり、思いのほか難航した。自分の卒業制作も進めていかなければいけない中で平行してやっていくことは正直大変だった。



準備も終盤から当日にかけて先輩、後輩、先生方も協力してくださった。まさに環境・建築デザイン専攻の関係者すべてでつくったプロジェクトであった。



今回は関西の他大学や彦根周辺にポスターやDMを置かせていただいたことで展示中300人を超えるお客さんにみていただくことができた。

また学生主体の卒業制作展になってから講評会時に外部ゲストを招いているが本年は横内敏人氏と宮城俊作氏に来ていただいた。建築やランドスケープの第一線で仕事をしている方々から各々に檄をいただいた。その後行われた討論会でも司会をしていただいた先輩のおかげもあり例年になく活気づいた。成功である。



1回生から3回生のとき私は先輩たちの卒業制作展を手伝いながら先輩のすごさを体感した。果たして自分がこれほどの卒業制作なんてできるものなのかと思っていた。その卒業制作も終わった。後輩には私たちがどのように映ったのか。ぜひ今後もすばらしい卒業制作展が行われることを願う。

この卒業制作展からはや1年が経つ。私たちはすでに新しいスタートを踏み出しており、今さらこと細かく書き記すことはできない。やはり鮮明に残っ

ているとすれば、すべてを終えたときの皆の笑顔。それがもたらしたものは、俺たちはやり遂げたのだという自信と、1人じゃ到底できないことが皆で力を合わせればできると無限の可能性を感じたことである。これを糧にしてそれぞれの新たな人生を歩んでいる。

なお、この卒業制作展の様子は、環境・建築デザイン専攻ホームページ <http://www.ses.usp.ac.jp/lab/kenchiku/> に紹介されており、そちらも参照いただければ幸いです。